

「わかやま未来学」の基盤整備に向けて

遠藤 史

今年度から始まった教養科目「わかやま未来学」は幸いにして多くの受講生に恵まれ、授業として好調なスタートを切った。「地域と融合する大学」を目指している本学にあって、COC+事業の一環として、実質的に全学生にとっての選択必修授業として機能しているので、来年度以降も同様の状況が続くと思われる。その状況を見据え、この授業の持続可能性を確保するために必要な基盤整備について考えてみたい。

このように書き出してみたものの、実際のところ「わかやま未来学」の基盤整備に関してはまだ解決が待たれる問題が多いというのが現状であろう。その1つとして、この授業の担当者の多くが、和歌山県を中心とするこの地域（以下、和歌山地域）を研究対象としていないということがある。もちろん筆者自身もこの中に含まれる。和歌山県に住む一市民として、地域の現状と行く末に相応の関心は抱いているつもりではあるが、それはあくまで生活者としての視点であって、「学」と名のつくような掘り下げに達するものではない。幸運なことに、現在のところこの授業を牽引しておられる先生方の熱意と見識によって授業の内容は発展しつつあるが、筆者の力はこのレベルには及ばない。かような担当者が存在することは、この授業の持続可能性を考えたとき、明らかにマイナス要因となりうる。

このような問題点に対する解決の方策はないだろうか。その答えはもちろん、担当者としてしっかり勉強することであろう。だがここで、もう1つの問題が立ち上がる。それは、和歌山地域について、何をどのように勉強すればよいのだろうかということだ。これはおそらく和歌山地域を専門とする研究者にとっては笑止千万な問いであろうが、筆者としてはそれなりに真剣に問うているつもりである。というのは、和歌山地域を対象とする啓蒙書や概説書の不足という問題がここには存していると思うからだ。たとえば、和歌山県立博物館には和歌山の歴史の展示があり、同自然博物館には県内の自然環境・動植物についての展示がある。このような展示と同等のレベルの情報を文章の形で提供し、かつ県内の現在の経済や文化について全体的に知ることのできるような書物、そのような選択肢が和歌山地域に関してはあまり見られないのではないだろうか。

念のために付け加えておくが、このような書物はいわゆる専門書とは異なるものだ。言うまでもなく和歌山地域は長い歴史と奥深い文化を有しており、その中における個々の事項の究明を目指す研究はかなりの厚みを持っている。ただしそれらはあくまで研究者コミュニティに向けられたものであろう。たとえばこの

地域で起こった特定の事件について、史料の詳細な検討に基づいて慎重に議論を積み上げていくような類の研究を行う専門書に挑んでみたところで、日本史研究の方法論を知らない筆者のような者にはせいぜい数々の疑問と誤解しか残るまい。したがって、上で筆者が求めているのは、このような高度なレベルの専門書ではない。必要なのは、このような専門書によって得られた知見を読者の興味を喚起するような形で提示してくれる書物（啓蒙書）であり、あるいはそのような知見の全体像を有機的にまとめて提示してくれるような書物（概説書）なのである。

同様の問題には、筆者だけでなく、受講生も直面していると思う。和歌山地域を深く理解し、その未来を考えていこうという趣旨の授業であればこそ、議論（この授業ではグループワークを積極的に取り入れている）の前提となる知識は欠かせない。しかしその知識を得ることは必ずしも容易ではない。必要に迫られて授業中にウェブサイトで検索した雑多な知識を基に議論を組み立てても、出来上がるものは砂上楼阁に似た結論でしかないのではないだろうか。何しろ前提としている知識の多くが出所不明で、「～だと言われている」とか、「～という話を聞いた」とかの類のものなのだから。明らかにここで必要とされているのは、より確固とした事実であり、それに基づいた知見であろうと思われる。たとえ歴史や文化に関する事実認識が、その置かれた社会的状況を時には繰り込んでいて、全面的に確実でないことがあるとしても、そのような留保を置いた上でなお、事実や知見の提示の必要性は否定できない。

抽象的な議論に陥るのを避けるために、ここで筆者が求めているような啓蒙書・概説書の例を、他県の例から1つ提示しておこう。ここに『信州学大全』（信濃毎日新聞社、2004年）という書物がある。この本の著者の市川健夫氏（東京学芸大学名誉教授）は人文地理学・地誌学を専門とする研究者で、専門分野の教育・研究の傍ら、出身地の長野県（信州）を対象とした「信州学」をテーマとしたより一般的な本を著しておられる。この「信州学」は言うまでもなく、長野県という地域に、地理・歴史・政治・経済・文化・風俗等の多種多様な側面からアプローチを試み、得られた知見を広く一般に伝えようとするもの（内容の多くは雑誌連載を基としている）で、体系化された専門的な「学」とは異なる。なおこの本は「大全」と銘打たれていることから分かります。全27章、1,000ページを超える大著であり、構成と分量から見て概説書にあたるだろう。市川氏は、同趣旨に立つ、よりコンパクトな「信州学」のシリーズ—たとえば『信州学ことはじめ』（第一法規出版、1988年）や『信州学テキスト』（第一企画、2012年）など—も著している。これらは300ページ内外の分量、数章から成る構成なので、啓蒙書あるいは入門書にあたると言えるか。

市川氏の著作には長野県という地域に関する具体的な事実、そしてそれらに基

づいて得られた知見が豊富に含まれている。人文地理学・地誌学という専門性を生かして、可能な限り大きな視点から地域の特徴を俯瞰する傾向を持っているのも特徴的だ。歴史上の出来事が、可能な限り現在との関連において叙述されている点も美点と言えるだろう。一例をあげるならば、「信州の養蜂業」（『信州学テキスト』pp.107-116）においては、大正時代の信州養蜂業の発展から論を起し、地域の植生の下での蜜源、全国的な養蜂の手法の視点から見た県下の養蜂の特色の指摘へと続く。同じく「佐久の旧城下町・小諸」（『信州学テキスト』pp.270-280）では、島崎藤村「小諸なる古城のほとり」の引用から地域の地理・文化の紹介が始まり、次いで歴史に移って、城下町と商業の発展、近代産業の発展と続く。

このような材料を基に議論を組み立てるならば、おそらくより深く、生産的な議論が展開できるのではないだろうか。そして、このことは実際、長野県という地域で行われている。上の3冊が地域の出版社から刊行されていることから分かる通り（第一法規出版は法律系の大手出版社であるが、創業者が長野出身であるため信州関係の本も出版してきた）、基本的な読者として想定されているのは地元の人々である。これが意味するのは、長野県の住民自身が、自らの地域に関する本を読み、啓蒙され、かつ考えているということだ。さらに市川氏の著作以外にも、様々な啓蒙書や概説書が県内の出版社から多数刊行されてきた（信濃毎日新聞社・しなのき出版・郷土出版などがその代表格である）。これらの本は市川氏の著作とは異なった視点から書かれていたり、市川氏の著作ではあまり取り上げられていない話題を扱っていたりするから、その相違を契機として、さらなる議論が喚起される可能性もあろう。

このような議論の全てが地域の未来を切り開くような提案につながるわけではないだろう。それでも、自らの暮らす地域について、信頼に足る事実に基づいて考えを巡らし、絶えざる議論を通じてその考えを練り上げていくことは、おそらく中長期的には、地域にさまざまな分野での貢献をもたらす効果があるはずだ。筆者の高校生の頃の記憶から一例をあげるならば、「持続可能な観光」という問題系は、観光地開発と環境保護の相克という問題をめぐる議論の提起により、1970年代から長野県内では議論されていた。その結果の一つとして、著名な観光地である上高地へのマイカー乗り入れ規制が実現したことは、観光地としての魅力を保持しつつ経済効果を創出するというプラス効果を、現在に至るまで持続的にもたらしている。

これと同様のことが「わかやま未来学」でできないだろうか。大部の概説書を今すぐに用意することはできないとしても、せめて確かな事実と、それに基づいた知見を受講生に紹介できるような仕組みは用意できないものだろうか。筆者の知る限り、こうした総合的な内容を含む最新の書物としては、和歌山県教育委員

会編『わかやま何でも帳』（和歌山放送、2016年）がある。ふるさと教育副読本として作成され、小・中学校や高等・特別支援学校などに配布された旧版の一般向け改訂版であり、書店でも販売されている。全7章からなり、それぞれ地理・自然・経済・歴史・文化・各自治体の概要・ゆかりの先人を扱っていて内容的にもバランスが取れている。大学生が利用するには内容的に食い足りない面もあるが、かえってそれが学生を自主的な資料探索に向かわせる効果もあるかもしれない。その際、この書物の親本となった『わかやま発見』（和歌山県教育委員会、2009年）がインターネット上で全面公開されていることが大きな助けになろう。若干資料的には古くなっているが、現在望みうる最も詳しい概説書としての『和歌山の研究』（安藤精一他編、清文堂出版、1979年、全6巻）をここに加えることもできるだろう。

贅沢を言わせていただけるなら、この『わかやま何でも帳』は学校の副読本が基になっているためか、記述も内容もいささか整然としていて、上で紹介した市川氏の著作のような個性を欠く点は否めない。したがって、ここには何らかの知見が加えられる必要および可能性があり、このことが「わかやま未来学」において受講生たちの力でできることの1つであると考えられる。授業中に生み出されたこのような「知見」は未完成なものではあろうが、上で紹介した長野県の例のように、それがさらなる議論を喚起する材料として機能するならば、授業の目的の半ばは達成されたと言ってよいだろう。